テウメーソスの奇蹟—その石化の意味[1]

吉 武 純 夫

はじめに

テーバイのテウメーソスという山[2]に人を襲う怪物じみた狐がいて、これを退治するためにケパロスの所有する秀逸な猟犬がこの地に持ち込まれてこれを追いかけたところ、両者は石に変身してしまったという話がある。アポロドーロスの記述によれば、この狐は何ものにも捕まえられないことが運命付けられ、この犬は追うものは何でも捕まえることが運命付けられており、狩が行なわれている最中の両者をゼウスが石に変えたのだという。しかし狐と犬の話はそこであっさり終わっている。彼らが石に変身したというのはどういうことなのかという問いが、今まで長いあいだ私の中でくすぶってきた。彼らはなぜ石化することになったのか。ゼウスは何を考えてそうしたのか。この石化には、例えば悲しみにくれるニオベーが石に変身した時のような必然性があるだろうか。両者が石化した結果、事態はどうなったのか。勝負はどちらが勝ったことになるのか。そういうこと一切を含めて、この石化は何を意味しているのか、というのが根本的な疑問である。

アポロドーロスでは記述が簡素なので、以上の疑問は、少し考えただけでは解決しない。もっと詳しいヴァージョンがどこかにあって、アポロドーロスはそれをかいつまんで書いているだけかとも思い、関連テクストを探ってみると、アポロドーロスを含めて実質的に 9 つのテクストがあることが分かったが、オウィディウス版をのぞきいずれも神話集らしい簡素な語りで、石化をあまり詳しくは語っていない。オウィディウスにしても、意匠を凝らした語りを展開しているものの、ケパルスの槍にまつわる悲話の脱線(digression)として[3]これを語っているに過ぎず、石化の意味を深く考えさせるものではない。それでも、それらのテクストには様々な話形があることが分かった。狩る犬と逃れ

---

[1] 西洋古典学研究室ですぐ上の先輩である高橋宏幸氏から私はオウィディウスについて多くのことを教えていただいた。中でも 1996 年の御論考は、ケパルスの物語における変身の扱いの妙について尽きない興味を私の中にもたらした。この記念号は恰好の機会であると思い、25 年来手付かずのままであったこの課題に取り組んでみることにした。

[2] この地の名を知らしめるような話は、この石化の神話以外にはほとんど何も伝わっていない。しかしこの山の地理については、J.Frazer(1898)がパウサニアスへのコメンタリー(ad. 9.19.1)において、幾らか詳しい説明を施している。

[3] Galinsky (1975),151. なお、cf.高橋(1996), 96; Hejduk (2011), 292.

る狐の無敵さを、絶対的なものとして掲げるものとそうでないものがあり、また神が彼らを石にしたと語るものとひとりでに石になったように語るものがある。彼らを石に変えた神の意図を語るものもあれば、神はどうしていいか分からずにそうしたと語るものもある。

以上のように、狐と犬の石化には様々な話形があるわけだが、それらに当たってみてもやはり、最初に抱いた疑問は容易には解決できなかった。いちど徹底的に調べて、分かることを整理してみる必要がある。そして、アポロドーロスにおけるだけでなく、より広くこの石化の話が含み持つ意味を考えてみたい。

１．本稿が問うこと

テウメーソスの狐と犬が石化したことの意味について、他の人たちはどういう解釈・説明をしてきたであろうか。調べてみると、この問題を論じた研究はほとんど見つからない。石化を「矛盾」の解決と見立てた人たちがいるが[4]、いずれも説明なしにそう述べているだけである。たしかに狐と犬の話は、少なくともアポロドーロスの話形においては、いわゆる「矛盾」の話とよく似ている。しかし、矛盾(あるいは puzzle, dilemma, impasse, paradox)の解決とは普通、矛盾がなくなることか、それが矛盾でなくなることを言うのではないか。石化が矛盾の解決であるという理屈は、結局のところよく分からない。

そこで私は、次のことを本稿の課題として設定することにした。すなわち、これは根本的に矛盾あるいはその概念をめぐる話なのかどうか、もしそうだとすれば、矛盾をどうしたという話なのか。またそうでないとすれば、これは何の話なのか、何がどうなったという話なのか。

この課題に取り組むための準備として、石化というモチーフがギリシア神話においては一般的にどういう意味を与えられているかを、ここで簡潔に整理しておきたい[5]。まず、石というものが持つ基本的な性質は、＜動かない＞＜変化しない＞＜無生物である(生気がない)＞、という 3 つにまとめられるだろう。そしてギリシア神話における石化はたいてい、次の 4 つの意味のうちのいずれかを強く含んでいる。すなわち、(ア)何者かの現在の状態の反転、(イ)何者かの現在の状態の強化、(ウ)事件の記念(モニュメントとしての保存)、(エ)神意のシグナルの 4 つである。(ア)か(イ)のタイプでしかも懲罰を構成している事例が圧倒的に多いが、それ以外を含めても、これら 4 つのタイプのどれかに単純に収まるものが大半である[6]。それに対し、テウメーソスの狐と犬に起こった石化では

---

[4] Griffin (1997), 41; Forbes Iriving (1990), 146; Collins (2006), 30; Purves (2011), 546 (n69); Cingano (2015), 259; 中務 (2020),140 など。

[5] おおむね Forbes Irving (1990)がその第 6 章で語っていることに従う。

[6] 詳しくは Forbes Irving (1990), 283-99 の石化のカタログ参照。

(ア)(イ)(ウ)が複雑に絡まりあっていて、他のどれとも似ていない。

このことを踏まえたうえで、以下の各節においては、議論を次のように進めたい。第2 節では、テウメーソスの石化を語ったすべてのテクストを確認し、追う犬と逃れる狐の無敵さがどう扱われているかという観点からそれらを整理する。第3節から第5節では、分析する価値の高いテクストをそれぞれの話形タイプから選び、そこにおいては石化にどんな意味が見込まれるかを検討する。そして得られた考察を第6節で整理し、最後に全体をまとめる。

２．9つのテクスト

テウメーソスの狐と犬が石化するストーリーそれ自体はかなり単純なものであるが、いろいろな時期に属する9つのテクストが少しずつ異なる話形を伝えている。それぞれのテクストが紹介している話形は、特に昔の話形として示されていない限り、そのテクストが書かれた時代に語られたものと見做したうえで、それらを古い順に並べると次のような配列になる。

（A）『スーダ辞典』τ429節1-9行。（紹介されている『エピゴノイ』は前7-6世紀）
（B）偽エラトステネース『カタステリスモイ(星座)』第1巻33節1-9行。（前3-2世紀）
（C）イストロス、第18断片11-14行。（前3世紀後半）
（D）オウィディウス『変身物語』第7巻755-93行。（前1-後1世紀）
（E）ヒュギーヌス『星の運行について』第2巻35節1-12行。（前1-後1世紀）
（F）アポロドーロス『ビブリオテーケー』第2巻57節6行-59節2行 (Wagner)[7]。（後1-2世紀）
（G）ポリュデウケース『辞林』第5巻38節6行-39節7行。(後2世紀)
（H）パウサニアース『ギリシア案内記』第9巻19章1節1-8行。(後2世紀)
（I）アントーニーヌス・リーベラーリス『変身物語集』第41話5節6行-10節4行。(後2-3世紀)

これらのテクストと訳は、紙幅をとるので本稿の末尾に「資料」として掲げることにする[8]。それぞれのテクストの中で石化を表している部分、および狐と犬の特別性を説明している部分には下線を付してある。以下に、各テクストが表している話形の特徴を簡略に記し、そのあと全体を概観する。

---

[7] J.Frazer による Loeb Classical Library 版テクストでは、第2巻4章6節34行-7節10行。
[8] 44-51頁。ギリシア語のテクストはTLG#E に採録されているものを、ラテン語のテクストはPHI 5 に採録されているものを用いた。

（A）『スーダ辞典』τ 429 節 1-9 行[9]。

『スーダ辞典』は後 10 世紀ころに編纂された書物であるが、この話形は、叙事詩の環において語られていたと記されているから前 7-6 世紀に語られていた話を反映していると考えられる[10]。そして、失われた叙事詩『エピゴノイ』の中にあった話であると推定されている[11]。

狐の害獣としての手ごわさは、神が罰として送り込んだという形で示唆されているだけである。したがって、只者でないことは分かるものの、その無敵さが絶対化されているとはいえない。犬の捕獲能力の秀逸さも、これまで獣を逃したことがなかったとされているだけである。やはり、只者でないことは分かるものの、絶対的に無敵な狩手とされているわけではない。

石化に関しては、現在分詞(καταλαμβανομένους)を用いることにより、捕獲が達成されようとしている瞬間に石化が起こったということが強調されている。

（B）偽エラトステネース『カタステリスモイ（星座）』第 1 巻 33 節 1–9 行。

偽エラトステネース（前3–2世紀[12]）においては、石化をもたらしたのはゼウスで、狐の逃げ手としての無敵さが神託により保証されている（λόγιον）。ならば、その神託がどの神のものであるにせよ、ゼウスはこの狐を負けさせるわけにはゆかなかったであろう。犬のほうは、エウローペーのための番兵（ゼウスが送ったに違いない）として付けられたという形でその特別性が示唆されているのみで、それが只者ではないということは分かるが、狩り手としての無敵さは絶対化されていない。

犬の側の狩る能力がどれほどのものかは分からないわけだが、ゼウスに「打つべき手がなかった」というのは、ゼウスは自分が番兵として任じたこの犬に不面目を負わせるわけにもゆかなかった、ということであると考えられる。

犬が石化されずに星座に引き上げられるという点が、他の話形と大きく異なっており、犬に対するゼウスの贔屓感がきわだっていることが、この話型のひときわ目立つ特徴である。

（C）イストロス、第 18 断片 11-14 行。

---

[9] （A）のテクストは実質的に、Photius, *Lexicon*, tau.582.20-583.8 のテクストとも、Aristodemus, Fr.5.1-12 のテクストとも、Apostolius, *Collectio paroemiarum*, 16.42.1-10 のテクストとも同じである。

[10] *OCD* (2003), s.v. ‘Epic Cycle’.

[11] West (2003), 57 (n13); Cingano (2015), 258.

[12] 『カタステリスモイ』の著者は、TLG では偽エラトステネースとされているが、Hard (2015), xviii に従って、キューレーネーのエラトステネースと見做す。

イストロス(前3世紀後半[13])のこの言は、下のヒュギーヌスの記述(E)の中で引用されているものであるが、イストロスに帰されているのはこの僅かな部分だけである。彼の知っていた話形のその他の部分もヒュギーヌスの伝える話形と同じであった、とまでは考えるべきではない。

さらに、「イストロスの言っている通り」なのは「ユッピテルがどうするべきか分からなかった」という部分だけなのか、それとも「両者を石に変えた」という部分も含むのか、という点も不明である(後者だけという可能性はまず考えられない)。しかし前者にかんしては、同時期のエラトステネースの言とよく重なっている。そういう話形がこの時代にある程度盛んに語られていたのだと思われる。

（D）オウィディウス『変身物語』第 7 巻 755-93 行。

オウィディウス(前1-後1世紀)のこの詩においては、犬が絶対的に無敵な追手であるとディアーナによって言明されているが、狐のほうはテミス女神が送ったとあるだけである。只ならぬ逃げ手だとしても、無敵とされているわけではない。しかし追跡と逃れの丁寧な描写により、なかなか決着がつきがたい勝負であることが巧みに描き出されている。

石化に関しては、オウィディウスは神に帰しているようでありながらも、それも一つの可能性に過ぎないことを示唆する書き方をしている。しかし、何のために石化したのかを(神の意図として)示すことにより、石化の意義を示しているのは巧妙である。

（E）ヒュギーヌス『星の運行について』第 2 巻 35 節 1-12 行。

ヒュギーヌス(前 1-後 1 世紀[14])においては、犬も追手として狐も逃げ手として、ともに絶対的に無敵とされている。ユッピテルが「どうすべきか分からなかった」というのは、両者が完全に互角な無敵さを有していて決着がつかないという状況のゆえであると考えるのが妥当だろう。

ヒュギーヌスは、星の犬座の説明としてこの文を書いているわけだが、この犬が星になったということは一切記していない[15]。この星座にただリンクされているだけであって、この犬自体は天に上げられたのではなく石のまま残ったと解すればよいと思われる。

ユッピテルがどうすべきかと悩んだという点は、先行するエラトステネースおよびイ

---

[13] ここで言及されているイストロスは、Le Boeffle (1985), 175 (n3)および Hard (2015), 103, 191 に従って、カリマコスの弟子であるアレクサンドリアのイストロスと見做す。

[14] 『星の運行について』の著者がどのヒュギーヌスであるかは議論のあるところだが、Hard (2015), xxvi に従って、後 12 年没の Gaius Julius Hyginus であると見做す。

[15] Hard (2015), 116; Le Boeffle (1983), 175 (n3).

ストロスから引き継いでいると考えられるが、狐と犬の双方の無敵さを絶対的なものとして確定化している点は、おそらくこのヒュギーヌスからの新しい特徴である。

（F）アポロドーロス『ビブリオテーケー』第 2 巻 57 節 6 行-59 節 2 行 (Wagner)。

アポロドーロス(後 1-2 世紀[16])においては、犬の追跡能力も狐の逃れる能力も、ともに絶対的に無敵であることが、宿命を表す 2 つの語(εἱμαρμένον, πεπρωμένον)を用いて印象的に示されている。

石化については、ゼウスが行なったとされているが、ゼウスの意中が何ら示されていないことが(B)(C)(D)(E)と異なっていて、ゼウスの影は薄い。その代わりにここで目立つのは、現在分詞(διωκομένης)の絶対分詞構文によって、石化が追跡の最中に行なわれたことを明記していることである。

（G）ポリュデウケース『辞林』第 5 巻 38 節 6 行-39 節 7 行。

ポリュデウケース(後2世紀)はこのパッセージを、ニーカンドロス(前2世紀)が語っていることとして述べ始めているが、どこまでがニーカンドロスの言なのかは、ほとんど分からない。その言は、どの犬がどの犬の子孫であるかという部分までだけで、下線を引いた箇所(φύσιν δ᾽ εἶχεν以下)はもはやニーカンドロスによるものでないという可能性が大きいと思われる。

ともあれポリュデウケースのこのテクストにおいても、犬と狐は、追跡と逃れの能力において絶対的に無敵であるとされている。もしその部分もニーカンドロスの言であるとしたら、その手の言説では彼が現存最古ということになるが、それはあまり期待できない。

石化については、誰によってなされたともされていない。しかし、石化は＜狐が逃れきることも犬が捕まえることもないため＞に必要な成り行きであったとされて、石化の意義がさりげなく示されている。

（H）パウサニアース『ギリシア案内記』第 9 巻 19 章 1 節 1-8 行。

パウサニアース(後2世紀)のテクストの狐は、怒ったディオニューソスによってテーバイ人を傷めつけるためにもたらされた獣だとされている。また犬は、アルテミス由来の犬とされている。ともに強力な競い手であることが予想されるが、いずれも無敵なものとして絶対化はされてはいない。

石化はどの神によって行なわれたともされておらず、自動詞(ἐγένετο)を用いてひとり

[16] アポロドーロスの年代は不確定な面があるが、Frazer(1921), xiv に従う。cf. Hard (1997), xiv.

でに起こったことのように表されている。石化したタイミングは、特にμέλλουσαという語を用いて、捕獲がまさに達成されようとしている(がまだしていない)ときのこととされている。

ディオニューソスとアルテミスに言及していることを除けば､以上の2点によりこの話形は『エピゴノイ』(A)と非常によく似ていると言える。パウサニアースは、テウメーソスの地に(僅かに変形されてはいるが)そのまま残っていた非常に古い話形を採録したのだと思われる。

(I) アントーニーヌス・リーベラーリス『変身物語集』第41話5節6行-10節4行。

アントーニーヌス・リーベラーリス(後2-3世紀)においては、犬の捕獲能力も狐の逃れる能力も、ともに絶対的に無敵であることが、神授の掟(θεμιτόν)という語によって確言されている。

石化については、ゼウスがなしたこととされているが、その意向は示されていない。石化の時の状況描写は、「テーバイの野に会すると」という極めて単純なものである。

以上のすべてのテクストを概観すると、見えてくるのは次のことである。すなわち、テクスト群はおおむね<少なくとも狐と犬のどちらかの無敵さを絶対化していない話形(A)(B)(D)(H)>と、<双方の絶対的な無敵さを明言する話形(E)(F)(G)(I)>という二手に分かれ、しかも前者4つのうち3つ(A)(B)(D)はオウィディウス(D)までの時期に属し、後者の4つはすべてHyginus(E)以降という時期に属しているということである。ここには明らかな傾向の転換が認められる。それは後1世紀ころのことで、それ以降はこの話を絶対的に無敵な競い手同士の勝負としてとらえて、その結末に石化を位置づけるというパタンが一般的となった、あるいはかなりの普及を見たと言うことができよう。

この後者の話型ではおおむね、完璧な「矛盾」の構図が置かれているわけだが、そこにおいて石化にはどんな意味が与えられているのだろうか。また、それまでの話形はこれとどう異なっているだろうか。以下では、石化をめぐる記述が比較的念入りになされているテクストとして、後1世紀以降のタイプからアポロドーロスを第3節で、それ以前のタイプからは『エピゴノイ』を第4節で取り上げ、それぞれにおける石化の意味を立ち入って考察してみたい。また、『エピゴノイ』のタイプに属するものの、石化前後の繊細な語りによって『エピゴノイ』とはかなり違う趣を呈しているオウィディウスも第5節で分析して、その石化の特徴をも見極めたい。

3．アポロドーロス

アポロドーロスの話形では狐の追跡と犬の逃れの無敵さが強調されているが、話はそれらが追い追われている最中にゼウスが双方を石に変えたという単純なもので、どちら

かが優勢になったりすることがあるわけでもない。両者はあくまでも絶対無敵であるというのが前提であり、まさに純粋な「矛盾」の状況が打ち出されている。まずは、この矛盾が石化によってどうなったのかを考えてみたい。

もし石化を、狐と犬が狐と犬でなくなることと見做すならば、石化によって矛盾も消滅したということができるだろう。しかし石化は石になって存在を続けることである。彼らがどんな形の石になったかという示しはないが、ただの石ころになったというよりも、元の姿をとどめた石になったと想像する方が自然である[17]。そうだとすれば、たしかに狩りの進行は石化によって停止したとしても、両者は両立不可能なまま存在し続けているのである。それなら、狩りが始まる以前の状況は解消されていないのであって、矛盾は解決したことにはならない。むしろ狩りが開始されたことにより、矛盾が顕在化しているのであり、石化した彼らはその状況のもとにおいて永遠化されたのだと言える。

次に、この石化によって狐と犬の勝負はどういうことになったのか、ということも考えてみよう。捕まらぬまま石になったのであるから、狐は永久に捕まらないことが確実となった。ならば狐の本領が守られ、犬は面目を失うのだろうか。しかし、狐は犬の追跡を振り切ったわけではない。また、彼らが石化したのは「狐が犬によって追われている最中」(διωκομένης οὖν ὑπὸ τοῦ κυνὸς τῆς ἀλώπεκος :59.1)のことであったから、犬のほうも依然として＜獲物を決して逃さぬ追跡＞の態勢にあるのだとすれば、なんら面目を失うわけではない。そうだとすれば、どちらが勝ったのでも負けたのでもなく、ただ勝負がつかぬことになったのである。

ただし、＜勝負がつかぬまま試合が終りになった＞というのとは違う。『イーリアス』23 巻の葬礼競技で強制終了となった槍突きの試合(Il., 23.797-810)と比べればすぐ分かるように、ここで双方は競り合う態勢のまま残っているのである。一方は逃れつつあり一方は追いつつあるという状態のまま、この競り合いが保たれ永続することとなった。つまり、この競り合いは石化によって、決着なしで永遠に続くものとなったと見做すことができる。

石化の意義を考えるための便利な方法は、もし石化が起こらなかったらどうなっていたかを想定してみることである。当然、決着がつかないはずではあるが、狐と犬が生身の動物である以上は、永遠に走り続けることはできない。やがて駆ける速度も下がってきて、先に疲れ果てた方が負けていつしか終りになってしまうであろう[18]。そうだとす

---

[17] ‘it (*sc.* petrification) is not a change of shape, but rather a continuing anomaly in which an inanimate substance assumes a human or animal form.’という Forbes Irving (1990), 140 の言は、一般的に認めうることであろう。

[18] 『イーリアス』22 巻で、アキレウスはヘクトルとほぼ互角の競走を、疲れることを知らぬかのように延々と続けるが(Il., 22.138-225)、23 巻では「追いまくり手足も疲れきった」状態で(Il., 23.63)眠るに至っている。このような肉体の現実も考えてよいのである。足の速さを特徴の一つとするアキレウ

れば、無敵の狩り手と逃れ手というせっかくの設定が無意味なものになってしまう。しかし「実際」には石化が起こったことによって、そのような成り行きは排除され、彼らはどこまでも互角に競り合う者同士の姿をかたどった永遠なる物体となった。

つまりアポロドーロスにおいては、石化した狐と犬は、「矛盾」という概念を具現化したものなのである。矛盾は解かれたのではない。それは石化によって目に見えるモノに、あるいは思い浮かべることができるモノにして人々に示されたのである。

4.『エピゴノイ』

『スーダ辞典』の「テウメーシアー」項目のテクスト(A)では、『テーバイの話』の著者たちが伝えているこの石化話は叙事詩の環に属する詩の中で語られていたとされている。その叙事詩は「テーバイ伝説圏の叙事詩」とする方が安全かもしれないが、『エピゴノイ』だとされるのが慣例であるので[19]、ここでは便宜のため『エピゴノイ』として扱うことにする。いずれにせよ、それはアポロドーロスより何百年も前に語られていた話であり、アポロドーロスにおけるのとはかなり違うことを含意したもののようである。要約で示されているだけであるから、本来どんな詳細が語られていたのか分からないが[20]、以下は、テクスト(A)で示されている要約が本来の語りの特徴を正しく反映していると想定しての議論である。

注目されるのはまず、狐と犬の能力についての記述である。狐の害獣としての能力も犬の狩る能力も並大抵ではないことはそれぞれ示唆されているが、いずれも絶対的に無敵だとはされていない。すなわち、狐はカドメイア人たちを罰するために神々が送り込んだ特別な獣である。その手ごわさは、神々がどれほどの執念を持って罰しようとしたのかにもよるであろうが、私たちにはそれを知る手掛りがなくてよく分からない[21]。そ

スが主人公であるからか、『イーリアス』においてはこのほかにも駆け競べや追い追われというモチーフが散見する。cf. Purves (2011).

[19] West (2003), 57 (n13); Cingano (2015), 258.

[20] 狐と犬の話がもとの叙事詩の中にどのように組み込まれていたかも不明である。カドメイア人に罰が下るというような形で、物語の本筋の一部を構成していたのかもしれないが、『イーリアス』におけるメレアグロスの引きこもり(Il., 9.529-99)やニオベの石化(Il., 24.602-17)のように教訓話として引き合いに出されただけかもしれないし、単に場所を説明するときの余談に過ぎなかったかもしれない。なお、Forbes Irving (1990), 10 は Kakridis (1930)や Griffin (1964)を援用しながら、ホメロスにおいては変身の例は少ないが、それは『イーリアス』の特殊事情であって、他の叙事詩においては変身がもっと自由に語られていた可能性があると言っている。

[21] 「カドメイア人たちがカドモスの子孫たちを王国から追放」したとは具体的にどういうことを言っているのだろうか。何例かの可能性を挙げることができるが(Apollod., 3.5.5 によればアンピオンとゼートスがライオスを、ibid., 3.5.9 によればクレオーンらがオイディプースを、同 ibid., 3.6.1 によればエテオクレースらがポリュネイケースを追放)、どの事例が該当するのかは分からない。追放の表現に未完了過去時制(ἐξέκλειον)を使っているから、どれか一度きりのことではないはずである。しか

うとしても、カドメイア人を全滅させるほどの怪物ではないはずで、オイディプースによって打ち負かされたスフィンクスというテーバイ伝説圏の近似の例を考えれば、この狐も絶対的に無敵な獣ではないという可能性は容易に察せられる[22]。また犬はかつて獲物をひとつも取り逃がしたことがないというが、それはそのときまでの経歴であって、将来も獲物を取り逃がすことがないとは何ら保証されていない。それならば、両者は容易には勝負のつかない相手同士ではあるが、どちらか片方が勝つとしても不思議はないものたちであると理解するのが妥当だろう。

そしてもう一つ重要なのは、石化するときの両者の状態がκαταλαμβανομένουςという現在分詞で表されていることである[23]。すなわち、両者が石化したのは、犬が狐をまさに捕獲しつつあるときのことだが、これは実に微妙な瞬間である。καταλαμβάνειν(捕まえる)という動詞を使っているから、διώκειν(追う)という動詞を使っていたアポロドーロスの場合よりも、犬の勝利に向かってずっと進んだ段階にある。アオリスト分詞でないからまだ捕獲してしまってはいない。しかしもうほとんど捕まえているのである。つまり、犬のほうがすでに優勢となっていて、もし石化がなかったとしたら、次の瞬間には狐を捕まえていたはずである。だからこれは、犬が狐を捕獲するのを石化が制止したということなのである。ただし、事態の進行が制止されたということであって、狩りそのものが解除されたのではなく、石になった両者はそこで同じ態勢を続けている、という点はアポロドーロスの場合と同じである。犬は狐を駆逐することを妨げられながらも、永遠に追跡を続けているのである[24]。

石化により生み出された状況もまた微妙である。これについても掘り下げて考えてみたい。この石化がもたらしたのは、(ア)狐が捕獲を免れた、(イ)狐による悪行が制止された、(ウ)犬が狐を優勢で追うという姿が永遠のものとなった、という 3 つのことである。

まず、狐は捕獲を免れたわけだが(ア)、ここで重要なのは、この捕獲が具体的にはどういうものなのかを理解することである。鬼ごっこのようにただ捕まえたら勝負がついて終わりというのではなく、猟犬は小動物を絞殺する[25]。あるいは、急所を噛んで相手

しいずれにしても、瀆神行為でもない罪への罰であれば、制裁がさほど執念深いものである必要はないと思われる。

[22] スフィンクスのほか、カリュドーンの猪も神から送られた害獣であるが、メレアグロスらによって退治された(Il., 9.533-49)。

[23] この現在分詞は、κύνα(犬)と ἀλώπεκα(狐)の両方を修飾している。κύνα には中動相の意味で、ἀλώπεκα には受動相の意味でかかっていると解される。

[24] ＜追いついて捕まえることはできないが永遠に追跡を止めない＞という典型例は、アーテー女神のあとを追うリタイ女神たちである(Il., 9.502-12)。アゲーノール(実はアポローン神)を追うアキレウス(Il., 21.600-05)も、有能な走者がいくら追っても追いつけないという例である。

[25] 絞殺：『万有百科大事典』の「狩猟」の項目；咬み伏せ：『小学館 スーパー・ニッポニカ 日本大百科全書＋国語大辞典』の「猟犬」の項目。

を動けなくする。猟犬が獲物を網の中へ追い込むという狩りの方法も古代からあったが[26]、ここでは犬自身が獲物を「捕まえる」とされている。それならば、狐はここで競走の敗北を免れたというよりは、滅びることを免れたのである。これにより、狐自身の、またそれを送り込んだ神々の面目が守られたことになるが、このことは、＜逃れ手としての無敵さに傷がつくことを免れた＞ということよりも、ずっと切実なレベルでの救済である。つまり、これはカドメイア人たちに下された戒めが根絶されるには至らなかったということを意味する。

また逆に、石化はカドメイア人に対する狐の悪行にも終止符を打った(イ)。ここで自然に生じる疑問は、なぜそのようなことになったかということである。＜神が贔屓の英雄等に手柄を立てさせるために、自分の最初の意図に反するような措置を講じる＞ということは神話では時々あるが[27]、石化によって狐の悪行が停止することは、すぐには犬の手柄には見えない。しかし、犬の猛追がなければこの事態は起こりえなかったわけだから、これはやはり犬の手柄だと言うこともできる。理屈をたどってみれば結局、狐による天罰がやむことになったのは、ある程度犬のおかげであったのであるが、それは必ずしも神によって意図されたからだと考える必要はない。単に(ア)や(ウ)という事態が生ずるために、付随的にそういうことになったに過ぎないとしても、おかしいことではない。(イ)の理由は無理して考えなくともよいのである。

いっぽう、犬が狐をほとんど捕まえそうなところまで追い詰めている姿で永遠化されたということ(ウ)は、明らかに、犬の面目を守ることである。それが誰かの意図であるか否かは分からないとしても、結果として犬の面目はこうして守られた。ただし、その面目は、どんなに追い詰めてもその相手を捕えることができないという制限つきの面目である。このことは、＜無敵の相手に対しては打つ手がない＞というのとは違い、敵がどれだけ有能かということとは関係ないことであり、＜いくら頑張っても超えることのできない限界が目の前に設定された＞ということに等しい。

以上の考察から、この話は次のことを表していると見ることができる。すなわち、神々の送り込んだ災厄を人間の側から駆逐しようと試みたが、かなりのところまで善戦できても、それを根絶することまではできなかった、それでもその努力は不断に続けられる。だから、この場にできた石のモニュメントは、神々から人間に天災が送られ、人間がそれに対して頭打ちになりながらも不断の防衛を続ける、というさまを象徴するものだとも言える。この石化は、神に帰されずひとりでに起こったことのように述べられている

---

[26] クセノポーン『狩猟について』で論じられているのは、もっぱら犬や槍などと網を併用する方法である。cf. Phillips & Willcock (1999), 8.

[27] 例えば、ゼウスがヘーラクレースのためにプロメーテウスを害する鷲の退治を許す(Ap.2.5.11)、アキレウスのためにアカイア軍を劣勢にさせる(Il., 1.558-59)、など。

ことから[28]、必ずしも神が人間に対して加える抑圧の話ではなくより素朴に、人間には抗えないものがあるという現実を表す話として受けとめることができるようにもなっている。

『エピゴノイ』の話形が表面的なレベルで伝えているのは、＜犬は狐という天罰を駆逐する寸前で石化によって制止されるが、永遠に狐を追い詰めるものになるという栄誉を得た＞という話であるが、それはより深いところでは以上のような意味をも持っているのである。

５．オウィディウス『変身物語』

オウィディウスのこのテクストは、9 つのテクストのうちでは、詩の本文からなっている唯一のものである。そこにおいては、ケパルスは自分が所有する槍の説明をするよう寄留先(アエギーナ)の王子にせがまれると、槍と一緒に手に入れた犬の話から語り始める。テーバエで狐退治に参加したときのこととして、犬による狐の激しい追跡が延々と続く様子が語られるが[29]、やがてケパルスが狐を自分の槍で仕留めようと思ってそこから一瞬目を離すと、その一瞬のあいだに両者は石になっていたという。槍の出る幕は当然なくなり、この話はすぐ切り上げられて次の話へと移る。

この話型では犬のほうだけ、ディアーナによって保証された何者にも負けない走者として、その絶対的な無敵ぶりが示される。狐については、スフィンクスが滅ぼされたあとを受けてこの地に送り込まれた「ペスト」(pestis: 7.764)と言われているだけで、絶対的といえる能力があるのかどうかは不明である[30]。したがって、両者が絶対的に互角だという前提はない。この点では『エピゴノイ』の話形と近い。ただし、捕まりそうで捕まらず、追いかけが際限なく続きそうな様子が念入に描かれるということから、じっさいはほぼ互角な競い手たちであることもうかがえる。

そして石化後もなお、双方のそれぞれが振り切る・捕まえるという動きを続けている

---

[28] 神に帰されることなくひとりでに変身が起こったということを示唆するテクストは、『エピゴノイ』と同じ時代(古典期より前という意味で)の『イーリアス』や『ホメーロス讃歌』にも、見出される。『イーリアス』において、ニオベーはいつのまにか石に変身したように語られているし(Il., 24.617)、『アフロディーテー讃歌』においては、アフロディーテー女神がティートーノスを寝室に閉じ込めて戸を閉めると、あとは「とてつもない声」(φωνὴ ἄσπετος)が聞こえるだけになったとして虫に変身したことが暗示されている(*h Hom.*, 5.237)。

[29] 競り合いの描写は 6 行(7.781-86)という長さに過ぎないが、その凝縮した表現が、それぞれの敏捷ぶりを述べ立てた先行する饒舌な紹介文(7.765-70、771-78)とも相俟って、競り合いの際限なさをかもし出している。

[30] テミス女神によって送り込まれたという文言はあるが(7.762)、それは必ずしも絶対的な手ごわさを保証するわけではない。またその行の削除も提案されている。オエディプスにうち負かされたスフィンクスのあとがまということは、どちらかというと無敵ではないことを予想させる。

かのように見えることが、わずか5語の表現によってだが巧妙に付言されていて(7.791)、大理石像になった以外は、石化する前とほとんど変らない状況が残ったということが強調されている。この意味ではアポロドーロスの話形と近い。

以上のことから、この話形は『エピゴノイ』とアポロドーロスの話形の両方の特徴をあわせ持っていると言えるが、この話形の最大の特徴はなんといっても、槍の話が石化と巧妙に組み合わされていることである。必中である槍が持ち込まれようとする瞬間まで狐と犬の白熱の競り合いが続き、また石化後は、それが決着のつかぬままほぼ同じ状態で永遠に継続する形となる。だから石化は、槍が狐と犬の競り合いに決着をつけることを妨げるとともに、今後この競り合いがいかなる干渉を受けることもないようにしたのだと言える。つまり、この石化は槍の介入を妨げ、また同時に、＜なかなか決着のつかない競り合い＞を＜永遠に決着のつかない競り合い＞に変えたのである。

ところで、槍の介入が妨げられたことはちょうど、『イーリアス』22 巻のアキレウスがヘクトルを追走する場面で、アキレウスが僚友たちにヘクトルを飛び道具で仕留めることを禁じるときの状況(22.205-06)とよく似ている。だからここでも、飛び道具の使用を厭う何らかの作用が働いたのかと類推するのは自然なことだが、それを厭うたのが誰かは謎である。語り手(ケパルス)が、このパッセージの最後で、そこに何らかの神がいてどちらも負けにならぬよう意図したという可能性を語るのが(7.792-93)、かろうじて得られるその答えである。しかしそれでも、どちらも負けないのがいいとなぜ神が思ったのかは語らない。深読みするならば、その神は狐と犬に同情したか、あるいはその後ろ盾としてのテミス女神とアルテミス女神の面目を気遣った、ということになるだろうが、語り手も詩人もそこまで責任を取るつもりは毛頭なさそうである。なぜなら、「もし神が彼らのもとにいたらの話だが」(si quis deus adfuit illis: 7.792)という言葉を用いて、神が介入したかどうか自体も曖昧なままにしているからである[31]。これは、そのような疑問に深入りせず適当に片付けて話を先に進めるための方便であったと見るべきだろう。

ストーリーの展開上で重要なのは、槍が試合に介入してその威力を発揮することが、石化によって防がれたということであり、それにより槍の出番がプロクリスの命を奪うところ(7.841)まで繰り下げられ、それへの期待感が高められるようになっている[32]。誰

---

[31] Bömer (1976), ad 7.793 は、そうすることによってオウィディウスが、石化を神に帰するという以外の考え方もあることを示唆したのではないかと指摘している。そうだとすると石化は誰の働きなのか、槍の介入を妨げたのは誰なのかということがよく分からなくなってしまうが、読者がそこに感じる軽いめまいは、オウィディウスがわざとに仕掛ける遊びであろうと思われる。まさにそのようなめまいを読者に味わわせながらどんどん話を進めるのが、『変身物語』の基本的流儀である。

[32] 高橋(1996)、98 頁が指摘しているように、『変身物語』の中では各エピソードの中で主要人物に変身が起きないことは稀である。そして狐と犬に起こった変身は、人の変身ほどパテティックではない。人物を巻き込むより感動的な変身がケパルスの物語において発生することを期待するのは、不

がなぜ狐と犬を石化したのかということは、ここではほとんどどうでもよいこととされているわけである。しかし石化自体には、上で示したようにこれまでにない独自の意味が与えられていると言える。

６．狐と犬の石化に読み取りうる二通りの意味

３～５節で取り上げた３つの話型を、相互間の違いがよく分かるように言い換えて時代順に並べると、次のように整理することができる。

①『エピゴノイ』(A)の話形：狐の害獣としての手ごわさと犬の狩る能力とが完全に互角であるという特別な設定はない。競り合いの末に犬が狐を捕らえそうになったときに石化が起こり、事態がそれ以上進展することが阻止される。それとともに、いまにも犬が狐を捕まえるという瞬間のクライマクティックなありさまが永久に保存されることとなった。

②オウィディウス(D)の話形：追う犬と逃れる狐がほぼ互角で接戦を続けていたが、槍の介入でこの接戦に決着が付けられそうになると石化が起こってそれを妨げる。それと同時に、＜なかなか決着のつきそうにない接戦＞は＜永遠に決着のつかない接戦＞へと格上げされた。

③アポロドーロス(F)の話形：犬の追跡と狐の逃れはもともと絶対的に互角と設定されている。決着がつかない定めの競り合いが始まると石化が引き起こされて、それまでの様子がそのまま、永久不変なる石という材質で再現されることとなった。

①では石化が、競り合いに決着がつくのを妨げる役割を果たしているのに対し、③では、もともと決着がつかない定めの競り合いに永遠不変な石という姿を与える役割を果たし、いわゆる「矛盾」という概念を具体化する役割を果たしている。いっぽう②の石化は、「矛盾」の概念を③のようにそのまま具象化して見せたわけではないが、それに近い働きをしているし、また①のようにひとりでに決着がつくのを制止したわけではないが、事態変更を阻止するという形でやはりそれに近い働きをしていると言える。だから、②の石化は、①と③の石化の両方の役割を兼ね備えていて、そのあいだの中間的な位置を占めるものとなっている。時間的な関係を考えると、③は②というステップを踏まえて出来上がっていったものであるように思われる[33]。(B)(エラトステネース)と(H)(パウサニアース)は(A)の話形(①)に近く[34]、(E)(ヒュギーヌス)と(G)(ポリュデウケース)と(I)(アント

自然なことでないだろう。プロクリスが槍に変身するというアイデアが思い浮かぶのは尤もなことである。cf.高橋(1996)、99 頁。

[33] もしこの話型がオウィディウスのオリジナルなものであるならば(おそらくその可能性は大きい)、この神話の発展において彼が果たした役割はきわめて大きいと言える。

[34] ただし、(B)の話形にはユニークなところもある。犬が石化せず、星となって狐と引き離されるこ

ーニーヌス・リーベラーリス) は(F)の話形(③)と近い[35]。

さらに整理すると、テウメーソスの狐と犬の石化には、＜狐の悪行の停止＞という共通の意味があるほかに、＜競り合いに決着がつくことの阻止＞という(①に典型的に見られる)意味と、＜もともと互角で決着のつかない競り合いの石による再現＞という(③に典型的に見られる)意味との、２通りの意味があると言える。この話を語るどのテクストも、そのいずれかの意味を引き受けている。

そして前１世紀以降に記録された話形の大方において優勢なのは、後者の意味である。それは「矛盾」の概念を表したものであるのだが、その面白みと真価は、『韓非子』難一に記されている「矛盾」の故事と比較してみるとよく分かる。というのは、『韓非子』では、武器売りが自分の売る楯と矛の無敵さを宣伝すると、客からその楯と矛ではどちらが勝つのかと問われて答えられなかったという。そのようなもの同士が両立することはない、というのが『韓非子』の話だとすると、③は、それをありえないこととはせず、相容れないもの同士のイメージを描き出し、しかも＜それらが競り合って永久に決着がつかない＞という様子を石によって具体化して見せている。それは現実の世界においては不可能だが、神話の世界においてはじめて可能なことなのである。それは、矛盾を解決することではなく、「矛盾」という概念を誰にでもわかるようにして示すことなのであった。

こうして見ると、狐と犬の石化というモチーフは、「矛盾」という概念の表象として発展し完成したかのように見える。では、①は、「矛盾」という概念を表象する神話が出来上がるまでの発展途上の話形に過ぎないのかというと、そうではない。というのは、第4 節で述べたように、そこでもやはり石化には深遠な意味が見出されるからである。すなわち、石となった狐と犬はそれぞれ、降りかかってくる天災と、それに対して完全に打ち返すことはできないながらも全力の防衛をやめない者の姿と見做すことができる。それは圧倒的な力の前における人間の営みの限界を象徴するものなのでもあった。

７．まとめ

以上の考察で得られた結果は、次のようにまとめることができる。

とと、狐が無敵とされていることである。このことからこの話形では、狐が捕まりそうになって、それを阻止するために引き離しが行なわれるのだと思われる。この点は(A)の話形(①)との根本的な近似性を示唆する。いっぽう(H)の話形は、狐と犬がどの神から送られて来たかを述べていることを除けば、(A)の話形(①)と酷似している。

[35] ただし(E)(G)(I)の話形はいずれも、狐と犬がどういう状態にあるときに石化が起こったのかわざわざ語っていない。それゆえ、狐と犬がどういう態勢の石像になったかという具体的なイメージが与えられない。石化に関するかぎり、(F)の話形(③)とのあいだにはその程度の僅かな差があるのみである。なお、(C)(イストロス)は簡素すぎて、①②③のどれに近いとも言えないし、どれとかけ離れているともいえない。

テウメーソスの猛狐とそれを追う犬が石に変身した神話には、9 つのテクストがあり、それぞれ少しずつ異なる話形を伝えているが、＜逃れ手と追い手が絶対的に互角＞という設定を持つものと持たないものとで大きく二つに分けられる。

前者を代表するものとしてアポロドーロスの話形、後者の代表として『エピゴノイ』の話形、その中間に位置するオウィディウス『変身物語』の話形という 3 つを選び、その設定と照らし合わせて、それぞれの石化にはどのような意味が見いだされるかを調べてみると、次のような結果が得られた。

『エピゴノイ』における石化は、犬が狐を捕えそうになったのを阻止するものであり、いまにも捕獲が達成されるというクライマクティックな競り合いのありさまを永久保存するものである。オウィディウスにおいては石化は、＜なかなか決着のつかない競り合い＞に槍が介入することを防ぐとともに、それを＜永遠に決着のつかない競り合い＞に格上げするものである。アポロドーロスにおいては、もとからの＜絶対的に互角で決着のつかない競り合い＞をそのまま石という材質で再現するものである。

これを整理すると、この神話の石化には、＜狐の悪行の停止＞という共通の意味のほかに、＜競り合いに決着がつくことの阻止＞という意味と、＜もともと互角で決着のつかない競り合いの石による再現＞という二通りの意味があると言える。そしてどの話形の石化も、これらのどちらかの意味を含み持っている。

後者の意味において石化は、「矛盾」という概念を具象化している。「矛盾の故事」とは異なるそのアプローチは、あり得ないことを現実の中に描いてしまう神話にいかにも似つかわしいふるまいである。いっぽう、「矛盾」の概念を描いてはいない『エピゴノイ』の石化も、天災などの圧倒的な力に対する人間側からの防衛の努力と限界を象徴するものと見做すことができる。テウメーソスの奇蹟にはこのように幾つかの深遠な意味を見出すことができる。

参考文献

Anderson, W.S., *Ovid's Metamorphoses, Books 6-10* (Norman, 1972).

Baldry, H.C., 'The Dramatization of the Theban Legend', *G&R* 3 (1956), 24-37.

Le Boeffle, A., *Hygin: L'astronomie* (Paris, 1983) (Collection de Budé).

Bömer, F., *P.Ovidius Naso: Metamorphosen, Buch VI-VII* (Heidelberg, 1976).

Cingano, E., '*Epigonoi*', in Fantuzzi & Tsagalis (2015), 244-60.

Collins, D.B., 'Corinna and Mythological Innovation', *CQ* 56 (2006), 119-32.

Davidson, J., 'Antoninus Liberalis and the Story of Prokris', *Mnemosyne* 50(1977), 165-84.

Davies, M. (ed.), *Epicorum Graecorum Fragmenta* (Göttingen, 1988).

Davies, M., *The Greek Epic Cycle* (London, 1989).

Davies, M., *The Theban Epics* (Cambridge Mass., 2014).

Fantuzzi, M. & Tsagalis, C. (ed.), *The Greek Epic Cycle and Its Ancient Reception*, (Cambridge, 2015).

Felton, D., 'On Reading *latrare* at Ovid *Met*. 7.791', *CW* 95 (2001), 65-69.

Forbes Irving, P.M.C., *Metamorphosis in Greek Myths* (Oxford, 1990).

Fowler, R.L., *Early Greek Mythography*, 2 vols. (Oxford, 2000-13).

Frazer, J.G., *Pausanias's Description of Greece Translated with a Commentary*, vol.5 (London, 1898).

Frazer, J.G., *Apollodorus: The Library*, vol.1 (Cambridge Mass., 1921) (Loeb Classical Library).

Galinsky, K., *Ovid's Metamorphoses: An Introduction to the Basic Aspects* (Oxford, 1975).

Gantz, T., *Early Greek Myth, a Guide to Literary and Artistic Sources* (Baltimore, 1993).

Griffin, J., 'The epic Cycle and the Uniqueness of Homer', *JHS* 97 (1977), 39-53.

Hard, R., *Apollodorus: The Library of Greek Mythology* (Oxford, 1997).

Hard, R., *Eratosthenes and Hyginus: Constellation Myths with Aratus's* Phaenomena (Oxford, 2015).

Haupt, M. & Korn, O., *P. Ovidius Naso: Metamorphosen*, Bd.1 (Zurich, 1969-86).

Hedjuk, J.D., 'Death by Elegy: Ovid's Cephalus and Procris', *TAPA* 141 (2011), 285-314.

Kakridis, J.T., 'Die Niobesage bei Homer', *RhM* 79 (1930), 113-22.

Miller, E.J., *Ovid III, Metamorphoses I, Books 1-VIII* (Cambridge Mass., 1916) (Loeb Classical Library)

OCD : Hornblower, S. & Spawforth, A. (ed.), *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed. (Oxford, 2003).

PHI 5 : *Packard Humanities Institute Classical Latin Texts CD ROM, ver.5.3* (Los Altos, 1998)

Phillips, A.A. & Willcock, M.M., *Xenophon & Arrian: On Hunting with Hounds* (Warminster, 1999).

Purves, A.C., 'Homer and the Art of Overtaking', *AJPh* 132 (2011), 524-51.

TLG #E : *Thesaurus Linguae Graecae CD ROM #E* (Irvine, 1999).

Torres-Guerra, J.B., '*Thebaid*', in Fantuzzi & Tsagalis (2015), 226-43.

Smith, W.(ed.), *Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology*, vol.1 (London, 1853).

Steiner, D., 'Eyeless in Argos; a reading of *Agamemnon* 416-19', *JHS* 115 (1995), 175-82.

Wagner,R.(ed.), *Apollodori bibliotheca. Pediasimi libllus de duodecim Herculis laboribus* (Leipzig, 1894). (Teubner Library)

West, M.L., 'Formation of the Epic Cycle', in Fantuzzi & Tsagalis (2015), 96-107.

West, M. L., *Greek Epic Fragments* (Cambridge Mass., 2003) (Loeb Classical Library).

Willcock, M.M., ‘Mythological Parageigma in the *Iliad*’, *CQ* 14 (1964), 141-54.
『小学館 スーパー・ニッポニカ 日本大百科全書＋国語大辞典』(小学館、1998-2003 年)(電子版)。
高橋宏幸「ケパルスの物語—オウィディウス『変身物語』第七巻 661-865 行—」、『西洋古典学研究』44 号(1996 年)、96-108 頁。
高橋宏幸(訳・解説)『オウィディウス　変身物語 1 』(京都大学学術出版会、2019 年)
中務哲郎(訳・解説)『ホメロス外典／叙事詩逸文集』(京都大学学術出版会、2020 年)。
西川靖二『ビギナーズ・クラッシックス 中国の古典 韓非子』（角川書店、2005 年）。
『万有百科大事典』第 20 巻(動物) (小学館、1974 年) 。
松本仁助(訳・解説)、『クセノポン　小品集』(京都大学学術出版会、2000 年)。
安村典子(訳・解説)、『アントーニーヌス・リーベラーリス　メタモルフォーシス(ギリシア変身物語集)』(講談社、2006 年)。

資料　狐と犬のストーリーを伝える 9 つのテクスト[36]　—第 2 節のために—

(A) Suidas, *Lexicon*, tau.429.1-9.　(*sc. Epigoni*; 7-6 c. B.C.)

Τευμησία
περὶ τῆς Τευμησίας ἀλώπεκος οἱ τὰ Θηβαϊκὰ γεγρα-
φότες ἱκανῶς ἱστορήκασι, καθάπερ Ἀριστόδημος· ἐπιπεμφθῆναι μὲν γὰρ
ὑπὸ θεῶν τὸ θηρίον τοῦτο τοῖς Καδμείοις, διότι τῆς βασιλείας ἐξ-
έκλειον τοὺς ἀπὸ Κάδμου γεγονότας. Κέφαλον δέ φασι, τὸν Δηϊόνος,
Ἀθηναῖον ὄντα καὶ κύνα κεκτημένον, ὃν οὐδὲν διέφευγε τῶν θηρίων　5
(ὃς ἀπέκτεινεν ἄκων τὴν ἑαυτοῦ γυναῖκα Πρόκνιν, καθηράντων αὐτὸν
τῶν Καδμείων), διώκειν τὴν ἀλώπεκα μετὰ τοῦ κυνός· καταλαμβανο-
μένους δὲ περὶ τὸν Τευμησὸν λίθους γενέσθαι τόν τε κύνα καὶ τὴν
ἀλώπεκα. εἰλήφασι δ᾽ οὗτοι τὸν μῦθον ἐκ τοῦ Ἐπικοῦ κύκλου.

テウメーシアー[37]。

[36] ギリシア語のテクストは TLG #E から、ラテン語のテクストは PHI 5 から採った。日本語訳は、すべて吉武による訳である。なお、それぞれのテクストの中で石化を表している部分、および狐と犬の特別性を説明している部分には下線を付した。
[37] テウメーシアーというのは、テウメーソスという地名の形容詞を女性形にしたものである。普通

テウメーソスの狐について、アリストデーモス[38]のように『テーバイの話』[39]を書いた人たちが十分に語っている。神々によってこの獣は、カドメイア人たちに送りつけられる。その理由は、カドモスから生まれた者たちを彼らが王国から締め出していったからである。そして、彼らが言うにはデーイオーンの息子ケパロス、すなわちアテナイ人で、獣らのうちこれを逃れおおせたものは一つもないという犬を手に入れたこの人が(それは自分の妻プロクリスを意図せずに殺してしまった者で、カドメイア人たちが彼を清めた)、その犬とともにこの狐を追いかける。すると、テウメーソスの近くで捕まえ捕まえられつつあったその犬とその狐が石になる。彼らはこの話を叙事詩の環から取った。

(『スーダ辞典』 τ 429 節 1-9 行)

(B) Pseudo Eratosthenes, *Catasterismi*, 1.33.1-9. (3-2 c. B.C.)

Κυνός.

Περὶ τούτου ἱστορεῖται ὅτι ἐστὶν ὁ δοθεὶς Εὐρώπῃ φύλαξ μετὰ τοῦ ἄκοντος· ἀμφότερα δὲ ταῦτα Μίνως ἔλαβε καὶ ὕστερον ὑπὸ Πρόκριδος ὑγιασθεὶς ἐκ νόσου ἐδωρήσατο αὐτῇ, μετὰ δὲ χρόνον Κέφαλος ἀμφοτέρων αὐτῶν ἐκράτησε διὰ τὸ εἶναι Πρόκριδος ἀνήρ· ἦλθε δὲ εἰς τὰς Θήβας ἐπὶ τὴν ἀλώπεκα ἄγων αὐτόν, εἰς ἣν λόγιον ἦν ὑπὸ μηδενὸς ἀπολέσθαι· οὐκ ἔχων οὖν ὅ τι ποιῆσαι ὁ Ζεὺς τὴν μὲν ἀπελίθωσε, τὸν δὲ εἰς τὰ ἄστρα ἀνήγαγεν ἄξιον κρίνας.

犬。

これについて次のことが語られている。すなわち、それはエウローペーのために槍とともに与えられた番犬であったと。ミーノースがその両方を手に入れ、その後プロクリスによって病を治してもらったときに彼女にそれらを与え、その後ケ

には「テウメーソスの女」を表すが、狐を意味する語 ἀλώπηξ が女性名詞であることから、それは特にこの土地の悪名高い狐を表すために使われることがあったようである。cf. Stephanus Grammaticus, *Ethnica*, 619.7.

[38] テーバイのアリストデーモスと呼ばれ(*FGH*383)、テーバイの歴史を書いた人として知られているが、詳しいことは分かっていない。cf. Smith (1853), 305.

[39] 叙事詩『テーバイス』ではなく、複数の人々による書き物の集積のようで、テーバイの歴史をつづったものらしい。West (2003), 57 は'Theban history'と訳している。

パロスが、プロクリスの夫となったことからそれら両方を所有したと。そして彼はそれ(犬)を連れて、何者によっても滅ぼされることはないと神託で言われていた狐を仕留めるためにテーバイへとやってきた。するとゼウスは、打つべき手がなくて、かたや狐を石に変え、かたや犬は妥当だと判定して星座へと引き上げた。

（偽エラトステネース『カタステリスモイ（星座）』第 1 巻 33 節 1–9 行）

(C) Ister, Fragmenta, 18.11 - 14. (3 c. B.C.)

Itaque quum in
unum pervenissent, Iupiter, nescius quid face-
ret, ut Ister ait, utrumque in lapidem con-
vertit.

そして、それら(訳者註：狐と犬)が一つの場所に会したので、ユッピテルは、イストロスが言っているように何をなすべきか分からなくて、両者を石に変えた。

（イストロス、第18断片11-14行）

(D) Ovidius, *Metamorphoses*, 7.755-93 (1 c. B.C.-A.D. 1 c.)

Cynthia, "currendo superabit" dixerat "omnes." 755
[...]
[scilicet alma Themis nec talia linquit inulta!] 762
protinus Aoniis inmittitur altera Thebis 763
pestis, 764
[...]
inminet hic sequiturque parem similisque tenenti 785
non tenet et vanos exercet in aera morsus.
ad iaculi vertebar opem; quod dextera librat
dum mea, dum digitos amentis addere tempto,
lumina deflexi. revocataque rursus eodem
rettuleram: medio (mirum) duo marmora campo 790
adspicio; fugere hoc, illud captare putares.
scilicet invictos ambo certamine cursus
esse deus voluit, si quis deus adfuit illis.'

キュンティアは「(この犬は)走りにおいてあらゆるものに勝るだろう」と言っていた。(755)
[...]
[当然、親切なテミスがこのようなことを罰せずに置くことはない。]すぐさまアーオニアのテーバエに別の難儀が送り込まれる。(762-64)
[...]
こちら(犬)は、急迫したり追う相手と互角になったりして、もう捕まえてしまっているように見えながらもまだ捕まえておらず、空しい咬みつきを宙に繰り出している。槍に助力を求めようと視線を動かしていた最中のこと、私の右手がそのバランスを確かめ、指を革紐にかけようとした瞬間、目をそらしすぐまた元のところへ視線を戻した。すると私が目にしたのは、野原の真ん中に二つの大理石、という奇蹟の光景だった。それを見れば君も、一方は逃れている、他方は捕まえていると思うに違いない。きっと、神のどなたかが、どちらともが走りの試合で負け知らずであることを望まれたのだろう、もし神が彼らのもとにいたとしたらの話だが。(785-93)

（オウィディウス『変身物語』第7巻755-93行）

(E) Hyginus Astronomus, *De astronomica*, 2.35.1-12. (1 c. B.C.-A.D. 1c.)

2.35.1 Canis. Hic dicitur ab Ioue custos Europae adpositus esse et ad Minoa peruenisse. Quem Procris Cephali uxor laborantem dicitur sanasse et pro eo beneficio canem munere accepisse, quod illa studiosa fuerit uenationis et quod cani fuerat datum ne ulla fera praeterire eum posset. Post eius obitum canis ad Cephalum peruenit, quod Procris eius fuerat uxor. Quem ille ducens secum Thebas peruenit. Ibi erat uulpes, cui datum dicebatur ut omnes canes effugere posset. Itaque cum in unum peruenissent, Iuppiter nescius quid faceret, ut Istrus ait, utrosque in lapidem conuertit.

犬。これ(この犬)は、ユッピテルによって見張りとしてエウローペーに番犬として付けられ、そしてミーノース王の手に至ったと言われている。そしてケパルスの妻であるプロクリスが困っていたその人を治療した、そしてその功労に対する褒

美として犬をうけとったと。というのは、彼女は狩猟に熱心であったし、その犬には、いかなる野獣もこれを引き離して進むことができないという特権が備わっていたからである。彼女の死後、この犬はケパルスの手に至った。プロクリスが彼の妻だったからである。彼はそれを引き連れてテーバイにやって来た。そこにはある狐がいて、その狐には、あらゆる犬から逃れることができるという能力が備わっていると言われていた。そして、それらが一つの場所に会したので、ユッピテルは、イストロスが言っているように何をなすべきか分からなくて、両者を石に変えた。

（ヒュギーヌス『星の運行について』第 2 巻 35 節 1-12 行）

(F) Apollodorus, *Bibliotheca,* 2.57.6-59.2 (Wagner)[40] (A.D. 1-2c.)

ὁ δὲ 57.6
ἔφη στρατεύσειν, ἐὰν πρότερον ἐκεῖνος τὴν Καδμείαν
τῆς ἀλώπεκος ἀπαλλάξῃ· ἔφθειρε γὰρ τὴν Καδμείαν
ἀλώπηξ θηρίον. ὑποστάντος δὲ ὅμως εἱμαρμένον ἦν
αὐτὴν μηδέ τινα καταλαβεῖν. (58) ἀδικουμένης δὲ τῆς χώ- 58.1
ρας, ἕνα τῶν ἀστῶν παῖδα οἱ Θηβαῖοι κατὰ μῆνα προ-
ετίθεσαν αὐτῇ, πολλοὺς ἁρπαξούσῃ, τοῦτ᾽ εἰ μὴ γένοιτο.
ἀπαλλαγεὶς οὖν Ἀμφιτρύων εἰς Ἀθήνας πρὸς Κέφαλον
τὸν Δηιονέως, συνέπειθεν ἐπὶ μέρει τῶν ἀπὸ Τηλε- 58.5
βοῶν λαφύρων ἄγειν ἐπὶ τὴν θήραν τὸν κύνα ὃν
Πρόκρις ἤγαγεν ἐκ Κρήτης παρὰ Μίνωος λαβοῦσα· ἦν
δὲ καὶ τούτῳ πεπρωμένον πᾶν, ὅ τι ἂν διώκῃ, λαμβά-
νειν. (59) διωκομένης οὖν ὑπὸ τοῦ κυνὸς τῆς ἀλώπεκος, 59.1
Ζεὺς ἀμφοτέρους λίθους ἐποίησεν.

その人(クレオーン)は、もし先に彼(アンピトリュオーン)がカドメイアを狐から解放してくれるなら、軍を差し出してもよいと答えた。というのは、怪物的な狐がカドメイアを痛めつけていたからである。ところが、仕事に取りかかってみると、誰もその狐を捕らえられないという定めがあった。そしてこの地が害され続けていたので、テーバイ人たちは月ごとに市民達の子供を一人ずつ彼女(狐)に供したの

[40] J.Frazer (1925)による Loeb Classical Library 版テクストでは、第 2 巻 4 章 6 節 34 行-7 節 10 行。

だった。もしそれをしなければ狐は多数の子供たちを強奪するはずであったからだ。そこでアンピトリュオーンは、デーイオーンの息子ケパロスのもとへとアテーナイに出向き、テーレボイア人たちからの戦利品の一部を与えるという条件で、プロクリスがミーノース王にもらってクレータから持ち帰った犬を、この狩に連れてくるようにと説得した。その犬には、追跡するものは何でも捕まえてしまうという定めがあった。そのため、かの狐がこの犬によって追われている最中に両者をゼウスは石に変えた。

（アポロドーロス『ビブリオテーケー』第 2 巻 57 節 6 行-59 節 2 行 (Wagner)）

(G) Julius Pollux Grammaticus, *Onomasticon*, 5.38.6-39.7. (A.D. 2c.)

Νίκανδρος δ᾽ ὁ Κολοφώνιος (frg 97 Schn)

τοὺς Ἰνδικοὺς κύνας ἀπογόνους εἶναί φησι τῶν Ἀκταίονος κυνῶν,
αἳ μετὰ τὴν λύτταν σωφρονήσασαι, διαβᾶσαι τὸν Εὐφράτην ἐπλανή-
5.39 θησαν εἰς Ἰνδούς· ὥσπερ καὶ τὰς Χαονίδας καὶ Μολοττίδας ἀπο-
γόνους εἶναί φησι κυνός, ὃν Ἥφαιστος ἐκ χαλκοῦ Δημονησίου 10
χαλκευσάμενος, ψυχὴν ἐνθείς, δῶρον ἔδωκε Διὶ κἀκεῖνος Εὐρώπῃ,
αὕτη δὲ Μίνῳ καὶ Μίνως Πρόκριδι καὶ Πρόκρις Κεφάλῳ. φύσιν
δ᾽ εἶχεν ἄφυκτος εἶναι, ὥσπερ ἡ Τευμησσία ἀλώπηξ ἄληπτος· καὶ
διὰ τοῦτο ἀπελιθώθησαν ἄμφω, ὁ μὲν ἵνα μὴ λάβῃ τὴν ἄληπτον
ἀλώπεκα, ἡ δ᾽ ἵνα μὴ φύγῃ τὸν ἄφυκτον κύνα. 15

コロポーンのニーカンドロスは、インド犬は、アクタイオンの所有したメス犬たち、それも狂気から回復したあと、エウフラテス川を渡ってインドまでさまよったメス犬たちの子孫であると言っている。それと同様に、カオン犬やモロッソス犬は、デーモネーソス産の銅でヘパイストス神がこしらえて魂を入れた犬の子孫だと言っている。ヘパイストス神はそれをゼウスに贈物として与え、ゼウスはエウローペーに与え、この女はミーノース王に、ミーノース王はプロクリスに、そしてプロクリスはケパロスに与えた。その犬が何ものをも逃さないという天性の定めがあり、それはテウメーソスの狐が何ものにも捕まらないというのと同様であった。そしてそのことゆえに、それら双方は石にされてしまった。それは、犬が、何ものにも捕まらない狐を捕まえることがないための、また狐が、何ものをも逃さない犬を逃れることがないためのことであった。

（ポリュデウケース『辞林』第5巻38節6行-39節7行）

(H) Pausanias, *Graeciae descriptio*, 9.19.1.1-8. (A.D. 2c.)

9.19.1 ἐπὶ ταύτῃ τῇ λεωφόρῳ χωρίον ἐστὶ Τευμησσός· 1
Εὐρώπην δὲ ὑπὸ Διὸς κρυφθῆναί φασιν ἐνταῦθα.
ἕτερος δὲ ἐς ἀλώπεκα ἐπίκλησιν Τευμησσίαν λόγος
ἐστίν, ὡς ἐκ μηνίματος Διονύσου τὸ θηρίον ἐπ᾽ ὀλέ-
θρῳ τραφείη Θηβαίων, καὶ ὡς ὑπὸ τοῦ κυνός, ὃν 5
Πρόκριδι τῇ Ἐρεχθέως ἔδωκεν Ἄρτεμις, ἁλίσκεσθαι
μέλλουσα αὐτή τε λίθος ἐγένετο ἡ ἀλώπηξ καὶ ὁ κύων
οὗτος.

その主要道路にテウメーソスという土地がある。エウローペーがゼウスによってそこに隠されたと人々は言っている。「テウメーソスの」という呼び名の狐について、以下の内容の他の話がある。すなわち、ディオニューソスの怒りのゆえテーバイ人たちを傷めつけるためにこの獣が養われたと、また、エレクテウスの娘プロクリスにアルテミスが与えたある犬によって捕まりそうになっていた時、その狐自体が石になったと、またその犬も石になったという。

（パウサニアース『ギリシア案内記』第9巻19章1節1-8行）

(I) Antoninus Liberalis, *Metamorphoseon synagoge*, 41.5.6-10.4. (A.D. 2-3c.)

καὶ ἐπεὶ αὐτοῖς ἐγένοντο παῖδες, 5.6
ὁ Μίνως διδοῖ τῇ Πρόκριδι τὸν ἄκοντα καὶ τὸν κύνα· τού-
τους δὲ οὐδὲν ἐξέφυγε θηρίον, ἀλλὰ πάντα ἐχειροῦντο.
[...]
Ἀμφιτρύων δὲ χρήζων τοῦ κυνὸς 7.5
ἐξίκετο παρὰ τὸν Κέφαλον, εἴγε ἐθελήσειεν ἅμα αὐτῷ ἐπὶ
τὴν ἀλώπεκα βῆναι σὺν τῷ κυνί, καὶ ὑπέσχετο τῆς λείας
Ἀμφιτρύων ἀποίσειν τῷ Κεφάλῳ τὴν μοῖραν, ἣν ἂν ἐκ τῶν
Τηλεβοῶν λάβῃ. (8) ἐφάνη γὰρ ἐν χρόνῳ τούτῳ Καδμείοις 8.1
ἀλώπηξ, χρῆμά τι ἐξηλλαγμένον· αὕτη συνεχῶς ἐκ τοῦ
Τευμησσοῦ κατιοῦσα πολλάκις τοὺς Καδμείους ἡρπάζετο
καὶ αὐτῇ προὐτίθεσαν παιδίον διὰ τριακοστῆς ἡμέρας, ἡ
δὲ κατήσθιε λαμβάνουσα.
[...]

ὁ δὲ Κέφαλος 9.6
ἀποδέχεται <τὸν λόγον> καὶ ἐλθὼν κυνηγετεῖ τὴν ἀλώπεκα.
(10) ἦν δὲ θεμιτὸν οὔτε τὴν ἀλώπεκα καταληφθῆναι ὑπό τινος 10.1
διώκοντος οὔτε τὸν κύνα ἐκφυγεῖν διωκόμενον οὐδέν. ἐπεὶ
δὲ ἐγένοντο ἐν τῷ πεδίῳ τῶν Θηβαίων, Ζεὺς ἐποίησεν ἀμ-
φοτέρους λίθους.

そして彼ら(ミーノースとパーシパエー)に子供たちが生まれたので、ミーノースはプロクリスに槍と犬とを与える。それらを逃れおおせた野獣はひとつとてなく、あらゆる野獣が仕留められるのだった。
[...]
アンピトリュオーンはその犬が必要だと感じ、もしやケパロスがその犬を伴って彼と一緒にかの狐の狩りに出かける気にならないかと思って、彼のもとへとやってきた。そしてアンピトリュオーンは、テーレボアイ人たちから分捕り品を得たならばその分け前をケパロスに渡すと約束した。(8)というのは、その頃カドメイア人たちのもとに、怪物とも言えるような狐が出現したからである。それは絶えずテウメーソス山から下りてきて、カドメイア人たちを頻繁に攫っていた。そして人々は 30 日ごとに小さな子供を彼女(狐)に供し、彼女はそれを捕らえて食うのだった。
[...]
ケパロスは<その話を>受入れ、やってきて狐の狩をする。(10) しかるに、狐が追跡する何ものかによって捕らえらることも、追跡される何ものかがこの犬を逃れおおせることも、神授の掟に反することなのだった。それで、彼らがテーバイの野に会すると、ゼウスは両者を石にした。
(アントーニーヌス・リーベラーリス『変身物語集』第 41 話 5 節 6 行-10 節 4 行)